

46

浅田宗伯門人、中野康章にみる 漢方医学の継承と古書の蒐集

野尻佳与子

奈良女子大学大学院 人間文化研究科

明治漢方最後の巨星といわれた浅田宗伯（1815-1894）には大勢の門人がいた。江戸で天保7年（1836）に開業後、明治27年に80歳で亡くなるまでの58年間に累計3千名が在籍したともいわれている。その一人が中野康章（1874-1947）である。明治24年に入門して宗伯の最期にも立ち会っている。浅田家は、養嗣子の浅田恭悦（1856-1909）が後を継いだ。学統としては東京の木村博昭（1866-1931）、京都の新妻莊五郎（1860-1930）、そして大阪の中野康章によって相承された。

しかし、康章の本職は漢方医ではなく福島村社中之天神社の社掌だった。さらに蒐集家という一面があった。昭和5年頃に神職としての報酬が月給15円程度ほどだったにもかかわらず、月に50円ほどの古書や古物を購入していたという。大量の古書類はどのような目的で蒐集したのであろうか。本報告では当時の時代背景と重ね合わせて、漢方医学の継承と古書の蒐集行為との関連性について考察した。

時代背景

康章の生涯は漢方医学の衰退期と重なる。西洋医学の知識のみを問う試験が医師の開業許可制として採用された明治7年に、秋田県の社家の次男として生まれた。そして宗伯の亡き後、恭悦のもとで修業中だった明治28年には、漢方継続願が国会で否決されて医師になれる可能性が閉ざされてしまった。唯一の方法は、西洋医学の知識を得て医術開業試験に受かることだった。独学でこれに合格したのは、この試験の最後の年で大正5年（43歳）のことだった。

昭和に入ると漢方の講演会や勉強会で講義するなど後進を指導する活動が増えた。京都大学医学部で西洋医学を身につけた森田幸門（1892-1966）が、康章の漢方治療に心酔して、開業したばかりの医院を一旦閉鎖して昭和2年から7年まで師事した。宗伯から学んだ漢方は幸門に継承されたのである。

康章の神社があった此花区福島近郊には紡績工場などが立ち並び、中之島周辺は大学医学部や附属病院など西洋医学の施設が増えて、道修町の薬種問屋も化学薬品を扱う製薬会社へと時代に即して変化していった。しかし、第二次世界大戦の激しい空爆により多くの命と建物が失われていった。そして悲運にも中之天神社は昭和20年に焼失し、康章は昭和22年に74歳で戦後の復興を見ることなく逝去した。

蒐集した古書の特徴

幸いに、康章が集めた蒐集品は疎開先にあり無事だった。現在は内藤記念くすり博物館にあり、約2万2千点の書物と約1万4千点の資料が収蔵されている。

（1）蔵書全体には次のような特徴が見られる。〔①重複本が多い。②東洋医学書と本草書が多い。③康章の書込みや使用の形跡は少ない。④重文国宝級の珍本や貴重書がない。〕

（2）それぞれに押された蔵書印は種類が多く、名前の「康章」と「蔵印、図書、珍藏、之印、護持、畫印、秘笈、雅玩、愛護、敬護、秘玩、清賞、眞賞、鑑賞、敬観、審定、書畫、寶藏、鑑定」とを併せた四文字の印が書物によって使い分けている。こうした蔵書印の文字には書物を「敬い」「護って」後世に伝えようとした気持ちが表れている。

（3）これは康章の漢方医学に対する考え方がわかる森田幸門の体験談である。幸門が康章の前で、「漢方の研究」といったところ、「漢方に研究なんていうことがあるかい」と叱られたという。「漢方は一途に踏襲して学んで会得すればいいのだ。研究という性質のものではない」とのことだった。

まとめ

康章が蒐集した書物は、漢方医学と関わりの深い医書や本草書が大半で重複本が多く含まれていた。稀少価値、美術価値、骨董的価値などを追求した蒐集行為ではなかったこと。自らが漢方医学を研究する目的ではなかったということが確認された。宗伯は、「われ死して50年、漢方は必ず復興すべし。」と力強く予言されたともいわれている。こうした特徴や状況から考察すると、康章は漢方医学の継承、将来の復興を強く願い、戦前、戦時下に失われてゆく書物を守ろうとしたのではないだろうか。